

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十三): 『〔仮名書き法華経〕巻第七』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	三田國文 No.57 (2013. 6) ,p.27- 44
JaLC DOI	10.14991/002.20130600-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十三)

——『仮名書き法華経』巻第七』翻刻・略解題——

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『仮名書き法華経』巻第七』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される<sup>1)</sup>。

本書は、漢訳の『妙法蓮華経』を仮名交じりの訓み下しにした仮名書き法華経である。常不軽菩薩品第二十から始まり、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四を収める巻第七のみを伝える。仮名書き法華経は、主に国語学の分野での研究蓄積があり、いくつもの伝本の存在が知られている<sup>2)</sup>。代表的なものとしては、鎌倉中期の妙一記念館本や元徳二年(一三三〇)写の足利学校本、近世中後期の月ヶ瀬本などがある。全巻揃いは現在のところ十種程度と少なく、本書と同様、一部のみを残すものや、法華経切として伝わるもの、訓読付きの版本なども含めると多数伝存する。諸本の系統については、妙一本の系統を引くものが多いも

の、諸本により和文化の方法は一樣でなく、語彙などに相違が見られるという。本書についても語彙や語順、左訓の表記など妙一本との共通が認められるが、独自表記も見受けられる。仮名書き法華経については、しばしば女性の説話を意図したとの指摘もなされており、本書物群の生成・享受や伝来を考える上でも興味深いものがある。書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一チ
  - ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
  - ・ 寸法 縦二九・七糎。横二二・二糎。
  - ・ 表紙 本文共紙。鳥の子紙。
  - ・ 首題 「妙法蓮華経メウハレンケキキョウ常不軽菩薩品第二十ジョウブケイサツホダヒ 七」
  - ・ 尾題 「妙法蓮華経巻第七」
  - ・ 丁数 墨付き四十五丁。
  - ・ 本文 半葉九行。漢字平仮名交じり。字高約二二・五糎。
  - ・ 奥書 なし。
  - ・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。
- 翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打

つなど、読解の便宜をはかった。

【注】

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝聞連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のラコ絵―幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論』笠間書院 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。
- (2) 中田祝夫氏編『妙一記念館本仮名書き法華経』影印篇上・下、翻字篇、索引篇、研究篇（仏乃世界社 一九八八・九三）、田島毓堂氏「法華経訓読史研究の諸問題」（『名古屋大学文学部研究論集』一・二四、一九九六）、柴佳世乃氏「法華経の訓読―仙岳院蔵『仮名書き法華経』」（『宝鏡寺蔵『妙法天経経解釈』全注釈と研究』笠間書院 二〇〇一）、野沢勝夫氏「仮名書き法華経』研究序説」（勉誠出版、二〇〇六）等参照。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金 若手研究(B)（課題番号二二七二〇〇九〇）、および基盤研究(C)（課題番号二五三七〇二五九）による研究成果の一部である。

【翻刻】

妙法蓮華経 常不軽菩薩品第二十  
そのときほとけ、得大勢菩薩摩訶薩に

七

つげたまはく、なんぢ、いま、まさにしるべし。も  
し、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、法華経  
をたまたんものを、もし悪口・罵詈・誹謗す  
ることあらは、大罪報をえんこと、さきにとく  
ところのごとし。その所得の功德は、さきにと  
くところのごとく、眼・耳・鼻・舌・身・意、清淨  
ならむ。得大勢、乃往古昔、無量無邊不可  
思議阿僧祇劫をすきて、ほとけましくき。  
威音王如来・應供・正遍知・明・行足・善逝・世間  
解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづけた  
てまつる。劫をは、離衰となづけ、くにをは大成と  
なづく。その威音王佛、かのよのなかにして、天人  
阿脩羅のために、法をときたまひき。聲聞  
をもとむるものゝためには、應せる四諦の法をと  
きて、生老病死をわたり、涅槃に究竟せし  
め、辟支佛をもとむるものゝためには、應せる十二  
因縁の法をときて、もろくの菩薩のためには、  
阿耨多羅三藐三菩提によせて、應せる六波  
羅蜜の法をときて、佛恵を究竟せしめたまひ  
き。得大勢、この威音王佛のいのちは、四十万億  
那由他恒河沙劫なり。正法よに任せし劫数は、一

〔一〇〕

〔一ウ〕

閻浮提の微塵のごとし。像法、よに住せし劫  
數は、四天下の微塵のごとし。そのほとけ、衆生を  
饑益しをはりて、しかうしてのちに、滅度した  
まひき。正法像法、滅盡してのち、この國土に

また、ほとけいてたまふことありき。また威音王  
如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・无  
上士・調御丈夫・天人師仏・世尊となつけた

てまつる。かくのごとく、次第に、二万億のほとけ  
ましくき。みな、おなしく一号なり。最初の威  
音王如来、すでに滅度したまひて、正法、滅  
してのち、像法のなかに、増上慢の比丘、大勢

力ありき。そのときに、ひとりの菩薩比丘あり。  
常不輕となづく。得大勢、なむの因縁をも

てか、常不輕となづく。この比丘、をよを見ると  
ころあり、もしは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷  
を、みなことごとく礼拝讚歎して、この言をな

さく、われ、ふかくなむぢらをうやまふ。あへて、輕  
慢せず。ゆへはいかん、なむたち、みな、菩薩の道を  
行じて、まさに、ほとけになることをうべければなり。

しかも、この比丘、もはら經典を讀誦せずして、たゞ  
礼拝を行じき。乃至とをく、四衆を見て、また  
また、ことさらにゆきて、礼拝讚歎して、この

言をなさく、われ、あへて、なんぢらをかろしめず、  
なんたち、みな、まさに、ほとけになるべきゆへに、  
四衆のなかに、瞋恚をなし、こゝろ不淨なるも

「(2オ)

のありて、惡口罵詈誶しいはく、この無智の比  
丘、いづれのところよりきたりてか、みつから、われ  
なんぢをかろしめずといひて、われらがために、記  
をさつて、まさに、ほとけになることをうべしと  
いふ。われら、かくのごときの虚妄の授記をも  
ちあらず。かくのごとく、多年を経歴して、つね  
に罵詈誶せられしかとも、瞋恚をなさずして、  
つねにこの言をなさく、なんぢ、まさに、ほとけに  
なすへしと。この語をとくときに、衆人、あ  
るひは、杖木・瓦石をもて、これを打擲すれと  
も、さりはしりて、とをく住して、なを高聲に  
となへて、いはく、われ、あへて、なむたちをかろし  
めず、なんぢら、みな、まさにほとけになるべし。

「(2ウ)

それ、つねにこの語をなすをもてのゆへに、  
増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、これ  
をなづけて、常不輕とす。この比丘をはりなむ  
とせしときにぞみて、虚空のなかにして、  
つぶさに威音王佛の、さきにときたまふと  
ころの法華經の、二十万億の偈をきゝて、  
ことごとくよく受持して、すなはち、かみのごとく  
眼根清淨、耳・鼻・舌・身・意根清淨をえ  
つ。この六根清淨をうることをはりて、さらに、  
壽命をますこと、二百万億那由他歳、ひろ

「(3オ)

くひとのために、この法華經をときき、ときに、増上  
慢の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、この

「(3ウ)

「(4オ)

「(4ウ)

ひとを軽賤して、不軽のなを為作せしもの、その大神通力・樂説辨力・大善寂力をえたるを見て、その所説をきゝて、みな信伏隨從しき。

この菩薩、また千万億の衆を化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめつ。命終

のち、二千億のほとけにあふことえたり、みな日月燈明となつてまつりき。その法

のなかにして、この法華経をとく。この因縁をもて、また、二千億のほとけにあいたてまつりき。おなじく、雲自在王となつてまつる。この諸佛の法のなかにして、受持讀誦し、もろくの四衆のために、この経典をとくがゆへに、これつねのまなこ、清淨に、耳・鼻・舌・身・意の諸根清淨なることえつ。四衆のなかにして、法をときしに、こゝろにおそるゝところなかりき。

得大勢、この常不輕菩薩摩訶薩、かくのことき、そこばくの諸佛を供養じてまつり、恭敬尊重讚歎し、もろくの善根をうへたり。のちにまた、千万億のほとけにあひたてまつり、また、諸佛の法のなかにして、この経典をとき、功徳成就して、まさに、ほとけになるこゝろへかりき。得大勢、こゝろにきて、いかに。そのとき、輕菩薩といひし、あにことひとならむや。すなはち、わが身、これなり。もし、われ、宿世にこの経を受

「(5オ)

「(5ウ)

持讀誦し、他人のためにとかざらましかは、とく阿耨多羅三藐三菩提をうるこゝろあたはし。

われ、先佛のみもとにして、この経を受持讀誦し、ひとのためにときがゆへに、とく、阿耨多羅

三藐三菩提をえたり。得大勢、かのときの四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、瞋恚のこゝろをもて、われを輕賤せしがゆへに、二百億劫、つね

にほとけにあはず、法をきかず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄にして、大苦惱をうく。このつみをふ

ふることをはりて、また、常不輕菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提に教化せるにあひにき。

得大勢、なむちかこゝろにきて、いかに。そのときの四衆、つねにこの菩薩をかるしめしもの、あに

ことひとならむや、いま、この會のなかの跋陀婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘尼、思

佛等の五百の優婆塞、みな阿耨多羅三藐三菩提にきて、退轉せざるもの、これなり。得大勢、ま

さにしるべし。この法華経は、おほきに、もろくの菩薩摩訶薩を饒益して、よく阿耨多羅

三藐三菩提にいたらしむ。このゆへにもろくの菩薩摩訶薩、如来滅後に、つねにこの経を受持讀誦解説書寫すべし。そのときに、世

尊、かさねてこの義をのへんとおほして、偈を

ときてのたまはく、

「(6オ)

「(6ウ)

「(7オ)

過去にほとけましくき。威音王となづけられたまつる。神智無量にして、一切を將導し、天人龍神の、ともに供養したてまつるところなり。このほとけの滅後に、法つきなむとせしとき、ひとりの菩薩ありき。常不軽となづく。ときに、もろくの四衆、法に計着せり。不軽菩薩、そのところにゆきいたりて、これにかたりていはく、われ、なんぢをかるしめず。なんぢ、道を行じて、みな、まさに、ほとけになるべければなり。諸人き、おはりて、輕毀し、罵詈せしに、不軽菩薩、よくこれを忍受しき。そのつみをへをはりて、命終のときにのぞみて、この經をきくことえて、六根清淨なり。神通のゆへに、壽命を増益して、また、もろくのひとのために、ひろくこの經をとく。もろくの着法の衆、みな、菩薩の教化成就して、佛道に任せしむることをかふる。不軽、命終して、無数のほとけにあひたてまつり。この經をとくかゆへに、無量の福をえし、やうやて、功德を具して、とく仏道なりき。かのときの不軽は、すなはち、わか身、これなり。との四部衆の着法のもの、不軽のなんち、まさにほとけになるべしといふをき、しは、この因縁をもて、無数のほとけにあいたてまつれり。この會の菩薩、五百の衆、あはせておよび、四部の清信の士女の、いま、わがまへにして、法をきくもの、こ

「(7ウ)

れなり。われ、前世に、このもろくのひとをすゝめて、この經の第一の法を聴受せしめ、ひとに開示し、をしへて、涅槃に住せしめ、世世にかくのとき經典を受持しき。億億万劫より、不可議にいたりて、ときに、いまし、この法華經をきくことをう。億億万劫より不可議にたりて、諸佛世尊、ときに、この經をときたまふ。このゆへに、行者、ほとけの滅後に、かくのとき經をきゝて、疑惑をなすことなかれ。まさに、こころをひとつにして、ひろくこの經をとくべし。世世にほとけにあいたてまつりて、とく仏道ならむ。

「(9オ)

「(8オ)

妙法蓮華經 如来神力品第二十一  
そのときに、千世界 微塵等の菩薩 摩訶薩の地より涌出せるもの、みな、佛前にして、こころをひとつにし、たなこころをあはせて、尊顔を瞻仰して、ほとけにまうしてまうさく、世尊、われら、ほとけの滅後に、世尊の分身の所在の國土、滅度のところにして、まさに、ひろくこの經をとくべし。ゆへはいかん、われら、またみつからこの眞淨の大法をえて、受持誦誦解説書寫して、これを供養したてまつらむとおもふ。そのときに、世尊、文殊師利等の、無量、百千万億の、舊住娑婆世界の菩薩摩訶薩、をよみもろくの比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・

「(9ウ)

「(8ウ)

「(10オ)

天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の一切の衆のまへにして、大神力を現したまふ。廣長舌をいだして、かみ、梵世までにいたらしめ、一切の毛孔より、無量無數色のひかりをはなちて、みな、ことごとく、あまねく十方世界をてらしたまふ。もろくの寶樹下の師子座上の諸佛も、またくかくのごとく、廣長舌をいだし、無量のひかりをはなちたもふ。釋迦牟尼佛、をよび寶樹下の諸佛、神力を現したまふとき、百千歳を満す。しかうして、のちかへりて、舌相をおさめて、一時に警歎し、ともに彈指したまふ。このふたつの音聲、あまねく十方の諸佛の世界にいたりて、地、みな、六種に震動す。そのなかの衆生、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、ほとけの神力をもてのゆへに、みな、この娑婆世界の無量無邊百千萬億のもろくの寶樹下の師子座上の諸佛を見たまつり、および釋迦牟尼佛、多寶如來とともに、寶塔のうちにましく、師子の座に坐したまへるを見たまつり、また、無量無邊百千萬億の菩薩摩訶薩、をよひもろくの四衆の、釋迦牟尼佛を恭敬し、圍繞してまつるを見る。すでに、これを見ることをはりて、みな、おほきに歡喜

〔10ウ〕

して、未曾有なることえつ。すなはち、ときに、諸天、虚空のなかにして高聲となへて、いはく、この無量無邊百千萬億阿僧祇の世界をすきて、くにより、娑婆となづく。このなかにほとけまします、釋迦牟尼となつたてまつる。いまもろくの菩薩摩訶薩のために、大乘經の妙法蓮華教菩薩法公所護念となづくるをときたまふ。なんだち、まさに、深心に隨喜すべし。また、まさに釋迦牟尼佛を禮拜供養してまつるへし。かのもろくの衆生、虚空のなかのこゑをきくことをはりて、たなごころをあはせ、娑婆世界にむかひて、かくのことき言をなさく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と、種種の華・香・瓔珞・幡・蓋、をよびもろくの嚴身の具・珍寶・妙物をもて、みな、ともに、はるかに娑婆世界に散す。散するところの、もろくの十方よりきたること、たとへは、くものあつまれるかごとくして、變じて寶帳となりて、あまねく、このあひだの諸佛のみうへにおほふ。ときに、十方世界、通達して無礙なること、一佛土のごとし。そのときに、ほとけ上行等の菩薩大衆につけたまはく、諸佛の神力はかくのことく、無量無邊不可思議なり。もし、われこの神力をもて、無量無邊百千萬億阿

〔12オ〕

〔11ウ〕

〔11オ〕

僧祇劫におきて、嘯累のためのゆへに、

この経の功徳をとくとも、なをつくすこと

あたはじ。要をもて、これをいは、如来の一切

の所有の法、如来の一切の自在神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、

をば、みな、この経にをきて宣示、顯説したまふ。

ふ。このゆへに、なんち、如来滅後に、まさにこゝ

ろをひとつにして、受持誦誦解説書寫し、説

のこく修行すべし。所在の國土に、もし受持

しとくしゆし解説し書寫し、説のこ

く、修行することあらん。もしは、経卷所住の

ところ、もしは、そのなかにしてもあれ、もしは

はやしのなかにしてもあれ、もしは樹下にし

てもあれ、もしは僧坊にしてもあれ、もしは白

衣舎にもあれ、もしは殿堂にありてもあれ、

もしは山谷曠野にもあれ、このなかにみな塔を

たて、供養すべし。ゆへはいかん、まさにしるべ

し。このところは、すなはち、これ道場なり。諸

佛こゝにして、阿耨多羅三藐三菩提をえ

たまふ。諸佛こゝにして、法輪を轉したまふ、

諸佛こゝにして、般涅槃したまふ。そのとき

に、世尊、かさねて、この義をのべんとおほして、

偈をよみて、

諸佛、救世者、大神通に住して、衆生をよろ

〔13オ〕

こぼしめむかためのゆへに、無量の神力を現

したまふ。舌相、梵天までいたり、身より無數の

ひかりをはなつ。佛道をもとむるものために、こ

の希有の事を現したまふ。諸佛、警效のみこ

ゑをよび、彈指のみこゑ、あまねく十方のく

に、きこえて、地、みな六種にうごく。ほとけの

滅度のうちに、よくこの経をたもたんをもて

のゆへに、諸佛みな歡喜して、無量の神力を現

したまふ。この経を嘯累せんかゆへに、受持

者を讚美すること、無量劫のなかにをきてすと

も、なをつくすことあたはじ。このひとの功徳は

ほとりなく、きはまりあることなむ。十方の

虚空の、邊際をうべからざるがごとし。よく、この

経をたもたんものは、すなはち、すてにわれをみ、

また多寶佛、をよびよろくの分身者を見、また、

わか、今日教化せるよろくの菩薩を見るに、な

りなむ。よくこの経をたもたんものは、われ、をよび

分身、滅度の多寶佛をして、一切みな、歡喜

せしめん。十方現在のほとけあはせて、過去未

來をまたみ、また供養したまつり、また

歡喜することえしめむ。諸佛の道場に坐し

て、ゑたまへるところの秘要の法、よくこの経

をたもたんものは、ひさしからずして、また、ま

さにうべし。よく、この経をたもたんものは、諸

〔14ウ〕

〔13ウ〕

〔15オ〕

〔14オ〕

法の義、名字をよひ言辞をきて、樂説窮盡なきこと、かぜの空中にして、一切障礙なきかことくならむ。如来滅後に、ほとけの所説の經の因縁、をよび次第をしりて、義にしたがひて、實にごとくにとかん。日月の光明のよくもろくの幽冥をのそくがごとし。このひと、世間に行して、よく衆生の闇を滅し、無量の菩薩をしへて、畢竟して一乘に住せしめん。このゆへに、有智のもの、この功德の利をきよて、わか滅度のうちに、この經を受持すへし。このひとは、佛道をきよて、決定してうたかひあることなげむ。

妙法蓮華經 囑累品第二十二  
そのときに、釋迦牟尼佛、法座よりたちて、大神力を現したまふ。みきのみてをもて、無量の菩薩摩訶薩のいたゞきをなで、この言をなしたまひて、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき、阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもて、なんだちに付嘱す。なんだち、まさにこゝろをひとつにして、この法を流布し、ひろく増益せしむへし。かくのごとく、みたびもろくの菩薩摩訶薩のいたゞきをなで、このことばをなしたまはく、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもて、なんだちに付嘱す。なんだち、まさにこゝろをひとつにして、この法を流布し、ひろく増益せしむへし。かくのごとく、みたびもろくの菩薩摩訶薩のいたゞきをなで、このことばをなしたまはく、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき

「(15ウ)

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんだちに付嘱す。なんだち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することを急しむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。もろくの慳怪なく、またおそるゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあつたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんだち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未來世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信せんものには、まさにために、この法華經を演説して、聞知することをえしむべし。そのひとをして、佛惠をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せずんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのごとくせば、すなはち、すでにもろくのほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろくの菩薩摩訶薩、ほとけの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこぶことその身に遍満しぬ。ますく恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

「(16オ)

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんだちに付嘱す。なんだち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することを急しむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。もろくの慳怪なく、またおそるゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあつたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんだち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未來世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信せんものには、まさにために、この法華經を演説して、聞知することをえしむべし。そのひとをして、佛惠をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せずんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのごとくせば、すなはち、すでにもろくのほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろくの菩薩摩訶薩、ほとけの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこぶことその身に遍満しぬ。ますく恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

「(17ウ)

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんだちに付嘱す。なんだち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することを急しむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。もろくの慳怪なく、またおそるゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあつたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんだち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未來世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信せんものには、まさにために、この法華經を演説して、聞知することをえしむべし。そのひとをして、佛惠をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せずんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのごとくせば、すなはち、すでにもろくのほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろくの菩薩摩訶薩、ほとけの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこぶことその身に遍満しぬ。ますく恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

「(18オ)

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんだちに付嘱す。なんだち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することを急しむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。もろくの慳怪なく、またおそるゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあつたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんだち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未來世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信せんものには、まさにために、この法華經を演説して、聞知することをえしむべし。そのひとをして、佛惠をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せずんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのごとくせば、すなはち、すでにもろくのほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろくの菩薩摩訶薩、ほとけの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこぶことその身に遍満しぬ。ますく恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

世尊の勅のごとく、まさにつぶさに奉行すべし。たゞししかれり。世尊ねかはくは、うらおもひたまふことましまさざれ。もろくの菩薩摩訶薩の衆、かくのごとく、三反ともにこゑをおこしてまうさく、世尊の勅のごとく、まさにつぶさに奉行すべし。たゞししかなり。世尊、ねかはくは、うらおもひたまふことましまさざれ。そのとくに、釋迦牟尼佛、十方よりきたりたまへるもろくの分身のほとけをして、をのく本土にかへらしめたまはんとして、この言をなしたまふ。諸佛、をのく所安にしたがひたまへ。多寶佛塔かへりて、もとのことくましますべし。この語をときたまふとき、十方の無量の分身の諸佛の寶樹下の師子の座のうへに坐したまへるもの、をよむ多寶佛あはせて上行等の、無邊阿僧祇の菩薩大衆、舍利弗等の聲聞四衆、をよび一切世間の天・人・阿脩羅等、ほとけの所説をきゝたまひて、みなおほきに歡喜しき。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

そのときに、宿王華菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊、藥王菩薩はいかにして娑婆世界にあそぶ。世尊、この藥王菩薩をこぼくの百千万億那由他の難行苦行いします。よきかな。世尊、ねかはくは、すこしき解説したまへ。諸

〔18ウ〕

天・龍神・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、また他の國土の諸來の菩薩、をよびこの聲聞衆きゝて、みな、歡喜せん。そのときに、ほとけ、宿王華菩薩につげたまはく、乃往過去無量恒河沙劫に、ほとけましくき。日月・淨・明・德・如・來・應・供・正・遍・知・明・行・足・善・逝・世・間・解・無・上・士・調・御・丈・夫・天・人・師・佛・世・尊となづく。そのほとけに八十億の大菩薩摩訶薩・七十二恒河沙の大聲聞衆ありき。ほとけのいのちは、四万二千劫なり。菩薩の壽命もひとしかりき。かのくに、は、女人・地獄・餓鬼・畜生・阿脩羅等、をよびもろくの難あることなし。地のたいらかなること、たなごゝることくして、瑠璃になされたり。寶樹莊嚴して、寶帳をうへにおほひ、たからの華幡をたれ、寶瓶・香爐國界に周遍せり。七寶をうてなとして、ひとつのきひとつの喜あり。そのき、うてなをさること、盡道なり。このもろくの寶樹にみな菩薩聲聞ありて、そのもとに坐せり。もろくの寶臺のうへに、をのく百億の諸天ありて、天の妓樂をなし、ほとけを歌歎して、もて供養をなしき。そのときにかのほとけ、一切衆生喜見菩薩、をよびもろくの菩薩、もろくの聲聞衆のために、法華經をときたまひき。この一切衆生

〔20オ〕

〔19ウ〕

ひ、たからの華幡をたれ、寶瓶・香爐國界に周遍せり。七寶をうてなとして、ひとつのきひとつの喜あり。そのき、うてなをさること、盡道なり。このもろくの寶樹にみな菩薩聲聞ありて、そのもとに坐せり。もろくの寶臺のうへに、をのく百億の諸天ありて、天の妓樂をなし、ほとけを歌歎して、もて供養をなしき。そのときにかのほとけ、一切衆生喜見菩薩、をよびもろくの菩薩、もろくの聲聞衆のために、法華經をときたまひき。この一切衆生

〔20ウ〕

〔19ウ〕

意見菩薩、ねがひて苦行をならひ、日月淨明  
徳佛の法のなかにして、精進經一行し、一心にほと  
けをもとむること、万二千歳を満しをはりて、  
現一切色身三昧をえてき。この三昧をえをは  
りて、こゝろおほきに歡喜して、すなはち、念言  
をなさく、われ、現一切色身三昧をえたること、みな  
これ法華經をきくことをえたるちからなり。われ、いま  
まさに日月淨明徳佛、をよひ法華經を供養  
したてまつるべし。すなはちのときに、この三昧  
にいたりて、虚空のなかより、曼陀羅華・摩訶  
曼陀羅華・細抹の堅黒栴檀をふらして、虚  
空のなかにみて、くものごとくにしてくだし、ま  
た、海此岸栴檀の香をふらしき。この香、六銖は  
價直、娑婆世界なり。もてほとけに供養した  
てまつる。この供養をなすことをはりて、三昧よりた  
ちて、みつから念言すらく、われ、神力をもて  
ほとけを供養したてまつるといへとも、しか  
じ。みをもて供養したてまつらんには、すな  
はち、もろくの香・栴檀・薰陸・兜樓婆・畢力  
迦・沈水・膠香を服し、また瞻蔔のもろく  
の華香油をのむこと、千二百歳を満し  
をはりて、香油をみにぬりて、日月淨明徳佛  
のみまへにして、天の寶衣をもて、みつから、み  
にまつひをはりて、もろくの香油をそゞき、

「(21オ)

神通力の願をもて、みつからみをとほしき。光  
明あまねく、八十億恒河沙の世界をてらす。  
そのなかの諸佛、同時にほめてのたまはく、よ  
きかなく、善男子、これ、まことの精進なり、これ  
を眞法をもて、如来を供養したてまつる  
となづく。もし、華・香・瓔珞・焼香・抹香・塗香  
と天繪幡蓋、をよひ海此岸栴檀の香、かくの  
ことさらに種種のもろくのをもて、供養  
すとも、をよぶことあたはざるところなり。たとひ  
國城妻子をもて布施すとも、また、をよはざる  
ところなり。善男子、これを第一の施となづく。  
もろくの施のなかにをきて、最尊最上なり。法  
をもて、もろくの如来を供養したてまつるかゆへに、こ  
の語をなしをはりて、をのく黙然したまひき。  
その身のひにもゆること、千二百歳、これをすぎ  
て已後、その身、すなはち、つきぬ。一切衆生喜  
見菩薩、かくのとき、法の供養をなしをはりて、  
命終のうちに、また日月淨明徳佛のくにの  
なかに生ぜりき。淨徳王のいゑにして、結跏趺  
坐して、忽然に化生し、すなはち、そのちゝのために  
しかも、偈をときていはく、  
大王、いままさにしるしめすべし。われ、かのところ  
に經行して、すなはちのときに、一切現諸身三昧  
をえ、つめとめて、大精進を行じて、所愛の身を

「(22ウ)

「(21ウ)

「(23オ)

すてき。この偈をときをかりて、ちゝにまうしてまうさく、日月淨明德佛、いまなを現にまします。われ、さきに、ほとけを供養したてまつりをはりて、解一切衆生語言陀羅尼をえたり。また、この法華經の八百万億那由他・甄迦羅・頻婆羅・阿閼婆等の偈をきけり。

大王、われ、いままさにかへりて、またほとけを供養したてまつるべしと。まうしをはりて、すなはち、七寶の臺に坐して、虚空に上昇すること、たかさ七多羅樹、ほとけのみもとに、ゆきいたりて、頭面にみあしを礼し、十指のつめをあはせて、偈をもてほとけをほめたてまつる。

容顏はなはだ奇妙にして、光明十方をてらしたまふ。われむかひ供養したてまつる。いま、よくかへりて、親近したてまつる。そのときに、一切衆生意見菩薩、この偈をとくことをはりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、世尊、なをよにまします、そのときに、日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩につげたまはく、善男子、われ、涅槃ときいたり、滅盡ときいたり。なんぢ、牀座を安施すべし、われ、今夜におきて、まさに般涅槃すべし。また、一切衆生意見菩薩に勅したまはく、善男子、われ佛法をもて、なんぢに囑累す。をよひもろくの菩薩大弟子あはせて、阿耨多羅

「(24才)

「(24ウ)

三藐三菩提の法、また三千大千七寶世界のもろくの寶樹寶臺、をよび給侍の諸天をもてことごとく、なんちにつく。わが滅度のち、所有の舍利またなんちに付囑す。まさに流布せしめひろく供養をまうけ、そこばくの千の塔をたつべし。かくのごとく、日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩に勅したまふことをはりて、よの後に涅槃にいたりたまひぬ。そのときに、一切衆生意見菩薩ほとけの滅度を見て、非感懊惱して、ほとけを戀慕したてまつる。すなはち、海此岸梅檀をもて、つみぎとして、佛身を供養してもて、これをやきたてまつる。ひ滅しをはりてのちに、舍利をひろひとりて、八万四千の寶瓶をつくりて、もて八万四千の塔をたつこと、たかさ三世界、表利莊嚴して、もろくの幡蓋をたれ、もろくの寶鈴をかけたなり。

そのときに、一切衆生意見菩薩、またみつから念言すらく、われこの供養をなすといへとも、こゝろなをいまたたらず、われいままさにさらに舍利を供養したてまつるべし。すなはちもろくの菩薩大弟子をよびて龍夜叉等、一切の大衆にかたははく、なんぢにまことに一心に念すへし。われ、いま日月淨明德佛の舍利を供養したてまつらん。」「(26才)にして、百福莊嚴のひちをとほすこと、七万二千歳、しかうしてもて供養したてまつる。無數の聲

「(25才)

「(25ウ)

聞をもとむる衆、無量阿僧祇のひをして、阿耨多羅三藐三菩提心をおこさしめ、みな現一切色身三昧に住することをえしめつ。そのときに

もろくの菩薩天人阿脩羅等、そのひぢなきを見て、憂悩悲哀して、このこの言をなさく、この一切衆生喜見菩薩は、これわれらが師なり。われを教化したまふものなり。しかあるに、いまひぢをやきて、身具足したまはず。ときに、一切衆生喜見菩薩、大衆のなかにして、この誓言をたつ、われ

ふたつのひぢをすて、かならず、まさにほとけの金色の身をうべし。まことにして、むなしからずは、わかふたつのひぢをして、還復することものとこのことくならしめよ。このちかひをなしおはりて、自然に還復しき。この菩薩の福德・智恵淳原なるによりて、いたすところなり。そのときにあたりて、三千大千世界六種に震動し、天より寶華ふり、一切の天人未曾有なることをえてき。ほとけ宿王華菩薩につけたま

はく、なんぢ、ころにをきていかん。一切衆生喜見菩薩あにことひとならんや。いまの藥王菩薩これなり。その身をすて、布施せるところ、かくのことく、無量百千万億那由他數なり。宿王華、もし發心して、阿耨多羅三藐三菩提をえんと思ふこととあらんものは、よくてのゆび、乃至あしのひとつのゆびをとほして、佛塔に供養したて

「(26ウ)

まつれ。國城妻子、をよび三千大千國土の山林河池、もろくの瓊寶物をもて供養せんものにまさらん。もしまたひとありて、七寶をもて、三千大千世界にみて、ほとけをよび大菩薩・辟支佛・阿羅漢に供養せん。このひとの所得の功德にはしじ。

この法華經の乃至一四句偈を受持せんには、その福もともおほし。宿王華、たとへは、一流江諸水のなかに、海を第一とするかごとく、この法華經もまたかくの如し。もろくの如来の説の經のなかにをきて、もとも深大なりとす。また土山・黒山・小鐵圍山・大鐵圍山、をよび十寶山、衆山のなかに、須弥山第一たるかごとく、この法華經もまたかくの如し。諸經のなかにをきて、もともそのかみたり。また衆星のなかに、月天子もとも第一たるかごとく、この法華經もまたかくのごとし。千万億種のもろくの經法のなかにをきて、もとも照明なりとす。また日天子のよくもろくの闇をのぞくかごとく、この經もまたかくの如し。よく一切の不善の闇を破す。またもろくの小王のなかに、轉輪聖王もとも第一たるかごとく、この經もまたかくのごとし。もろくの經のなかにをきて、もともその尊たり。また帝釋の三十三天のなかにをきて、王なるかごとく、この經もまたかくの如し。諸經の

「(28オ)

「(28ウ)

なかの王なり。また大梵天王の一切衆生のちなるかごとく、この経もまたかくのごとし。一切の賢聖學無學、をよむ菩薩のころをおこせるもの、ちなり。また一切の凡夫人のなかに、須陀洹斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛、第一たるかごとく、この経もまたかくのごとし。一切の如来の所説、もしは、菩薩の所説、もしは聲聞の所説、もろくの経法のなかにとも第一たり。よくこの經典を受持することあるものもまたかくのごとし。一切衆生のなかにきて、また第一たり。一切の聲聞・辟支佛のなかに、菩薩第一たり、この経もまたかくのごとし。一切のもろくの経法のなかにきて、もとも第一たり。ほとけ諸法の王とましますかごとく、この経もまたかくのごとし。諸経のなかの王なり。宿王華、この経はよく一切衆生をすくうものなり。この経はよく一切衆生をして、もろくの苦惱をはなれしめたまふ。この経はよくおほきに、一切衆生を饒益して、その願を充滿したまふ。清凉のいけのよく一切のものろくの渴乏のものにみつるかごとく、さむきものひを多たるかごとく、はだかなるものころもをえたるかごとく、あきひとのぬしをえたるかごとく、この母をえたるかごとく、わたりにふねを多たるかごとく、やまひにくすしをえたるかごとく、くらきにとほしびをえたるかごとく、まどしきにたから

「(29オ)

「(29ウ)

を多たるかごとく、たみの王をえたるかごとく、賈客のうみをえたるかごとく、とほしひの闇をのぞくかごとく、この法華経もまたかくのごとし。よく衆生をして、一切の苦一切の病痛をはなれ、よく一切の生死の縛をとかしめたまふ。もしひとこの法華経をきくことをえて、もしはみつからかきもしはひとをしへてもかゝしむ。所得の功德は、ほとけの智慧をもて、多少を籌量する

「(30ウ)

とも、そのほとりを多じ。もしこの経巻をかきて、華・香・瓔珞・焼香・抹香・塗香・幡蓋・衣服・種種のとしび・蘇燈・油燈・諸香油燈・瞻蔔油燈・眞曼那油燈・波羅羅油燈・波利師迦油燈・那波摩利油燈をもて供養せん。所得功德またく無量ならん。宿王華、もしひとありてこの藥王菩薩本物品をきかんものは、また無量無邊の功德をえん。もし女人ありて、この藥王菩薩本物品をききて、よく受持せば、この女身をつくして、のちにまたうけし。もし如来滅後のちの五百歳のなかに、もし女人ありて、この經典をききて、説のこく修行せば、こゝに命終して、すなはち、安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆に圍繞せられたまへる住處にゆきて、蓮華のなかの寶座のうへに生ぜん。また貪欲のためになやまれし。またく瞋恚・愚癡のためになや

「(31ウ)

「(31ウ)

「(30オ)

まさし。またく、橋慢・嫉妬・諸垢のためになやまされし。菩薩の神通無生法忍をえむ。この忍をうることをはりて、眼根清浄ならん。この清浄の眼根をもて、七百二十億那由他恒河沙等の諸佛

如來を見たてまつらん。このときに諸佛、はるかにともにほめてのたまはく、よきかなく、善男子、

なんちよく釋迦牟尼佛の法のなかにして、

この經を受持し讀誦し思惟し、他人のためにとける。所得の福德無量無邊なり。ひも

やくことあたはじ、みづもたよはすことあた

はじ。なんちが功德をは、千佛ともにきたまふとも、

つくさしむること、あたはじ。なんちいますでに

よくもろくの魔賊を破し、生死のいくさを

やぶり、諸餘の怨敵をもみなことく摧

滅しつ。善男子、百千の諸佛神通力をもちてと

もになんちを守護したまふ。一切世間天人のなかに

をきてなんちにしくもろくあることなし。たゞ

し如來をのそきたてまつりてそのもろくの

聲聞・辟支佛・乃至菩薩の智慧・禪定なんち

とひとしきものあることなし。宿王華、この菩薩

はかくのとき功德智慧のちからを成就せり。もし

ひとありて、この藥王菩薩本物品をきつて、

よく隨喜し讚善せんは、このひと現世にく

ちのなかよりつねに青蓮華のかほいだし、

身の毛孔のなかより、つねに牛頭栴檀のかほいださん。

「(32オ)

所得の功德はかみの所説のごとし。このゆへに、宿王華、この藥王菩薩本物品をもてなんちに嘯累す。わか滅度のちくくの五百歳のなかに、閻浮提に廣宣流布して、断絶せしめ、惡魔・魔民

もろくの天龍夜叉・鳩槃荼等をして、そのたよりをえせしむることなかれ。宿王華、なんちまさに神通

のちからをもて、この經を守護すべし。ゆへはいかん

この經はすなはち、閻浮提のひとのやまひの良藥

たり。もしひとやまひあらんに、この經をきくこと

えば、やまひすなはち消滅して、不老不死ならん。

宿王華、なんちもしこの經を受持することあらん

ものを見ては、青蓮華をもて抹香をもりみて

て、そのうへに供養すべし。散しをはりて、この念

言をなせ、このひとは、ひさしからすして、かならず

まさにくさをとりて、道場に坐してもろくの魔

軍をやぶるへし。まさに法のかいをふき、大法の

つゝみをうちて、一切衆生の老病死海を度脱す

べし。このゆへに、佛道をもとめんもの、この經

典を受持することあらむひとを見ては、まさにか

くのごとく、恭敬のごゝろをなすべし。この藥王菩

薩本物品をときたまひしときに、八万四千の

菩薩、解一切衆生語言陀羅尼をえつ。多寶如來

寶塔のうちにして、宿王華菩薩をほめてのた

まはく、よきかなく、宿王華、なんち不可思議の功

「(32ウ)

「(33ウ)

所得の功德はかみの所説のごとし。このゆへに、宿王華、この藥王菩薩本物品をもてなんちに嘯累す。わか滅度のちくくの五百歳のなかに、閻浮提に廣宣流布して、断絶せしめ、惡魔・魔民

もろくの天龍夜叉・鳩槃荼等をして、そのたよりをえせしむることなかれ。宿王華、なんちまさに神通

のちからをもて、この經を守護すべし。ゆへはいかん

この經はすなはち、閻浮提のひとのやまひの良藥

たり。もしひとやまひあらんに、この經をきくこと

えば、やまひすなはち消滅して、不老不死ならん。

宿王華、なんちもしこの經を受持することあらん

ものを見ては、青蓮華をもて抹香をもりみて

て、そのうへに供養すべし。散しをはりて、この念

言をなせ、このひとは、ひさしからすして、かならず

まさにくさをとりて、道場に坐してもろくの魔

軍をやぶるへし。まさに法のかいをふき、大法の

つゝみをうちて、一切衆生の老病死海を度脱す

べし。このゆへに、佛道をもとめんもの、この經

典を受持することあらむひとを見ては、まさにか

くのごとく、恭敬のごゝろをなすべし。この藥王菩

薩本物品をときたまひしときに、八万四千の

菩薩、解一切衆生語言陀羅尼をえつ。多寶如來

寶塔のうちにして、宿王華菩薩をほめてのた

まはく、よきかなく、宿王華、なんち不可思議の功

「(34オ)

「(33オ)

徳を成就して、すなはち、よく釋迦牟尼佛にかくのごときのことをとひたてまつりて、無量の一切衆生を利益す。

妙法蓮華經 妙音菩薩品第二十四

そのときに、釋迦牟尼佛、大人相の肉髻、光明をはなち、をよび眉間白毫相のひかりをはなちて、あまねく東方百万億那由他恒河沙等の諸佛の世界をてらしたまふ。このかすをすぎをはりて、世界あり。淨光莊嚴となづく。そのくに、ほとけまします。淨華宿王智如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづく。無量無邊の菩薩大衆のために恭敬し圍繞せられたまひて、ために法をときたまふ。釋迦牟尼佛の白毫の光明あまねくそのくにをてらしたまふ。そのときに、一切淨光莊嚴國のなかに、ひとりの菩薩あり。なを妙音といふ。ひさしくすてにもろくの徳本をうへて、無量百万億の諸仏を供養し、親近したてまつり、しかうして、ことごとく、甚深の智恵を成就し、妙幢相三昧・法花三昧・淨徳三昧・宿王戲三昧・無縁三昧・智印三昧・解一切衆生語言三昧・集一切功德三昧・清淨三昧・神通遊戲三昧・惠炬三昧・莊嚴王三昧・淨光明三昧・淨藏三昧・不共三昧・日旋三昧をえたり。かくのごときらの、百万億恒河沙等の諸大三昧をえたり。

釋迦牟尼佛のひかり、その身をてらしたまふ。すなは

〔34ウ〕

〔35オ〕

ち、淨花宿王智佛にまうしてまうさく、世尊、われ、まさに娑婆世界に往詣して、釋迦牟尼佛を禮拜し、親近供養したてまつる。をよび文殊師利法王子菩薩・藥王菩薩・勇施菩薩・宿王華菩薩・上行意菩薩・莊嚴王菩薩・藥上菩薩。そのとき、淨華宿王智佛、妙音菩薩につ

げたたまはく、なんぢ、かのくにをかるしめて、下劣のおもひをなすことなけれ。善男子、かの娑婆世界は高下不平にして、土石・諸山あり。穢惡充滿し、佛身卑小なり。もろくの菩薩衆もそのかたちまたちいさし。しかるに、なんぢが身は、四万二千由旬、わが身は六百八十万由旬なり。なんぢが身は第一端正なり。百万の福ありて、光明殊妙なり。

このゆへに、なんぢゆきて、かのくにもしほほとけ、菩薩をよひ國土に、下劣のおもひをなし、かろしむることなけれ。妙音菩薩、そのほとけにまうしてまうさく、世尊、われいま娑婆世界にいたらむこと、みなこれ如来のちから、如来の神通遊戲如来の功德智恵莊嚴ならむ。こゝに、妙音菩薩、座をたゞず、身動揺せずして、三昧にゐる。三昧のちからをもて、耆闍崛山にをきて、法座をさることをからすして、八万四千の衆寶蓮華を化作す。閻浮檀金をくきとし、白銀を葉とし、金剛をひげとし、甄叔迦寶をもて、その臺とせり。そのときに、文殊師利法王

〔36オ〕

〔36ウ〕

〔37オ〕

子、この蓮華を見て、ほとけにまうしてまうさく、世尊、このなむの因縁ありてか、まつこの瑞を現ぜる。そこばくの、千万の蓮華ありて、閻浮檀金をくきとし、白銀を葉とし、金剛をひけとし、甄叔迦寶をもて、その臺とせり。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これ妙音菩薩摩訶薩の淨華宿王智佛のくにより、八万四千の菩薩のために、圍繞せられて、この娑婆世界に来至して、われを供養し、親近礼拝せんとおもひ、また法華經を供養し、きゝたてまつらんとおもへるなり。文殊師利、ほとけにまうしてまうさく、世尊この菩薩は、なむの善本をうへなんの功德を修してか、しかもよくこの大神通力ある、いつれの三昧を修行する。ねかはくは、われらかためにこの三昧の名字をときたまへ。われらまたつとめて、これを修行せんと思ふ。この三昧を行して、すなはちよくこの菩薩の色相の大小・威儀・進止を見ん。たゞし、ねかはくは、世尊神通力をもて、かの菩薩をきたらしめて、われをしてみることをえしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これひさしく滅度の多寶如來、まさになんぢかためにしかもその相を現したまふへしと。ときに多寶佛、かの菩薩につげたまはく、善男子きたりて、文殊師利法王子なんぢが身を見んとおもへる。ときに妙音菩薩、かのかにより瀝して、八万四千の菩薩とともに

「(37ウ)

「(38オ)

「(38ウ)

發來す。所經のもろくくんに六種に震動して、みなことくく、七寶の蓮華をふらし、百千の天の樂うたさるに、をのづからなる。この菩薩のめは、廣大の青蓮華の葉のことし。たとひ百千万のつきを和合せらん。その面貌端正なるにことまたこれにすぎたり。この身は真金のいろにして、無量百千の功德莊嚴せり。威德嚴盛にして、光明照耀し、諸相具足して、那羅延固の身のことし。七寶の臺にいでりて、虚空に上昇せり。地をされること、七多羅樹もろくくの菩薩衆恭敬し圍繞して、この娑婆世界の普聞囉山に來詣しぬ。いたりをはりて、七寶の臺よりおりて、價直百千の瓔珞をもたもちて、釋迦牟尼佛のみもとにいたりぬ。頭面にみあしを礼して瓔珞を奉上す。しかふして、ほとけにまうしてまうさく、世尊、淨華宿王智佛、世尊を問訊したまふ、少病少惱起居輕利にして、安樂に行したまふやいなや。四大調和ししますやいなや。世の事しのびたまひつべしやいなや。衆生は度しやすしやいなや。貪欲・瞋恚・愚癡・嫉妬・慳慢おほきことなしやいなや。父母を孝せざるることなしやいなや。沙門をうやまはず。邪見なることなしやいなや。善心ありやいなや。五情を攝すやいなや。世尊、衆生はよくもろくくの魔怨を降伏するやいなや。ひさしく滅度の多寶如來、七寶の塔のうちにましゝて、

「(39オ)

「(39ウ)

きたりて法きゝたまふやいなや。また多寶如来を問訊したまふ、安穩少悩にして、堪忍しひさしく住したまふやいなや。世尊、われ多寶佛の身を見たてまつらんと思ふ。たゞし、ねかはくは世尊、われにしめして見せしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、多寶仏にかりたまはく、この妙音菩薩あひ見たてまつるえんをおもへり。ときに多寶佛、妙音につけてのたまはく、よきかなく、なんぢよく釋迦牟尼佛を供養したてまつり、をよひ法華經をき、あはせて、文殊師利等を見んかために、ことさらこゝに來至せり。そのときに華德菩薩ほとけにまうしてまうさく、世尊、この妙音菩薩は、なんの善根をうへ、なんの功德を修してか、この神力ある。ほとけ華德菩薩につけたまはく、過去にほとけましくき、雲雷音王・多陀阿伽度・阿羅呵三藐三佛陀となつてたてまつる。くにを現一切世間となつて、劫をは喜見となづく。妙音菩薩万二千歳にきて、十萬種の妓樂をもて、雲雷音王佛に供養したてまつり、あはせて、八萬四千の七寶の鉢を奉上しき。この因縁果報をもて、いま淨華宿王知佛のくに、生じてこの神力あり。華德、なんぢがこゝろにきて、いかん、そのとき雲雷音王佛のみもとに、妙音菩薩とし妓羅をもて供養し、寶器を奉上せしもの、あにことひとならんや。いまこの妙音菩薩摩訶薩これなり。華

「(40オ)

德、この妙音菩薩はむかし無量の諸佛に供養し親近して、ひさしく德の本をうへたり。また恒河沙等の百千萬億那由他のほとけにあへり。華德、なんぢたゞ妙音菩薩はその身こゝにあるとみる。しかも、この菩薩、種種の身を現して、處處にもろくの衆生のために、この經典をとく。あるひは梵王の身を現じ、あるひは帝釋の身を現じ、あるひは自在天の身を現じ、あるひは、大自在の身を現じ、あるひは、天大將軍の身を現じ、あるひは毘沙門天王の身を現じ、あるひは轉輪聖の身を現じ、あるひはよろくの小王の身を現し、あるひは長者の身を現し、あるひは居士の身を現し、あるひは宰官の身を現し、あるひは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を現し、あるひは長者居士の婦女身を現し、あるひは宰官の婦女の身を現し、あるひは婆羅門の婦女の身を現し、あるひは童男童女の身を現し、あるひは天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人の身を現して、この經をとく。諸有の地獄・餓鬼・畜生、をよびもろくの難處みなよく救濟す。乃至王の後宮にして、變じて女身となりて、この經をとく。華德、この妙音菩薩は、よく娑婆世界のよろく

「(41ウ)

「(40ウ)

「(42オ)

「(41オ)

「(42ウ)

の衆生を救護するものなり。この妙音菩薩はかくのごとく種種に變化し、身を現して、この娑婆國土にありて、もろくの衆生のために、この經典をとくに、神通・變化・智慧にをきて、損滅するところなし。この菩薩は、若干の智慧をもて、あきらかに娑婆世界をてらして、一切衆生をして、をのく所智をえしむ。十方恒河沙の世界のなかにしても、またくかくのごとし。もし聲聞のかたちをもて、得度すべきものには、聲聞のかたちを現してために法をとく。辟支佛のかたちをもて得度すべきものには、辟支佛のかたちを現してために法をとく。菩薩のかたちをもて得度すべきものには、菩薩のかたちを現してために法をとく。ほとけのかたちをもて、得度すべきものには、すなはちほとけのかたちを現してために法をとく。かくのごとく種種に度すべきところのものにしたかひてためにかたちを現す。乃至滅度をもて得度すべきものには、滅度を示現す。華徳、妙音菩薩摩訶薩は大神通智慧のちからを成就せること、その事かくのごとし。そのときに、華徳菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊この妙音菩薩はふかく善根をうゑたり。世尊、この菩薩はいつれの三昧に住してか、よくかくのごとく、變現するところありて、衆生を度脱したまふ。ほとけ、

〔43オ〕

〔43ウ〕

華徳菩薩につけたまはく、善男子、その三昧をば現一切色身となづく。妙音菩薩、この三昧のなかに住して、よくかくのごとく無量の衆生を饑益す。この妙音菩薩品をときたまふときに、妙音菩薩とともにきたれるもの、八万四千人みな現一切色身三昧をえつ。この娑婆世界の、無量の菩薩、またこの三昧をよひ随羅尼をえつ。そのときに、妙音菩薩摩訶薩、釋迦牟尼佛、をよひ多寶佛塔を供養したてまつることをはりて、本土還歸す。所經のもろくの國六種に震動して、寶蓮華をふらし、百千万億の菩薩の妓樂をなす。すてに本國にいたりて、八万四千の菩薩のために、圍繞せられて、淨華宿王智佛のみもとにいたりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、われ娑婆世界にいたりて、衆生を饑益し、釋迦牟尼佛を見たてまつり、をよひ多寶佛塔をみたてまつりて禮拜供養し、また文殊師利法王子菩薩を見、をよび藥王菩薩・得勤精進力菩薩・勇施菩薩等を見つ。また、この八万四千の菩薩をして、現一切色身三昧をえしめつ。この如音菩薩來往品をときたまひしときに、四万二千の天子は、無生法忍をえ、華徳菩薩は法華三昧をえてき。

〔44オ〕

〔44ウ〕

妙法蓮華經卷第七

〔45ウ〕

〔45オ〕